

海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルについて

伊藤 彰男*・鍾 英華**・楊 薇***・田 園****

国際化が著しく進む現代社会において、コミュニケーションの手段としての非母語言語能力を習得することの意味は大きい。これまで、いかなる教育方式によって習得させるか、多くの研究がなされ見解が提示されてきた。しかし、非母語言語をどのように習得させるかという外国語教育方式のあり方は、現在でもなお重要な課題である。本研究では、非母語言語を中国語とし、実践性を強調した方式が、効果的であり有効であることを明らかにする。①総合力としての言語能力形成に関わる二つの能力系統—「聴解会話」系統と「読解作文」系統—をいかに結びつけるか。②言語習得過程におけるカリキュラム—教育内容編成のあり方。③中国語教育モデルの設計について。言語習得の基本は、「聞く」「話す」「読む」「書く」の四要素の総合力としての言語能力を形成することである。以上の三点から、本研究では、児童とは違った成人の言語習得過程では、実際の生活に結びつく生き生きした言語習得を重視する、実践性を核とした教育モデルの構築が重要であることを提起する。

キーワード：実践性、聴解会話系統—読解作文系統、カリキュラム編成、母語—外国語関係

一 海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルの基本定義

海外における中国語教育モデルは、海外の中国語以外の言語を母語とする言語環境において、中国語を外国語として教える教育モデルと捉える。すなわち、海外の中国語学習者の要望に応じて、系統性のある教学方式を展開し、質が高く且つ効率の良い教学の基本モデルである。

海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルは、実践性教学原則に基づいて、学習プロセスの中に学習者の実践を強調する教学モデルであり、実践過程において言語知識と言語能力を育て、確実に中国語を身につけるプロセスである。海外における中国語教育の環境は、他の非母語言語教学の環境と同じように、外国語としての言語環境の乏しさ、教員不足、教材の乏しさ、実践の場を創り出す困難さ、課程編成の不合理性、カリキュラム体系構築の問題、など様々な問題を抱えている。それに対して、標準方式と認められる教育モデルを確立し、学習者が求める教育を提供することは重要なことである。

一般的に教育モデルとは、次のように指摘される。「特定の教育思想と理論を基に、典型的且つ標準化された教育又は学習方式、すなわちモデルである。カリキュラム、教材、教育活動の規範を創り出すことは、教育思想と教育理論を示す有効な道であり、その教育モデルと操作の基準の重要性は、中国語教育の国際化が進むとともにますます明らかとなるであろう。」(馬箭飛, 2004)

近年、多くの研究者が、国際学生の立場から、外国語としての中国語教育の基本モデルに関する研究を進めてきている。例えば、フランスのJel Bellassen (白樂桑)氏が提起した“中国語再循環教育モデル (Chinese Recycled, 2002)”、中国の研究者馬箭飛氏の“中国語交際任務教育モデル (2000)”、北京大学の李曉琪氏が提起した“単語—文法教育モデル (2004)”、天津師範大学の孟国氏、王瑋氏、鍾英華氏が提起した“生視聴教育モデル (1997)”などが挙げられる。世界全体の国際化に伴うコミュニケーションの増加に従って、外国語としての言語は、交流の架け橋として役立つ一方、言語を通じた文化についての自らの理解と体験は、特別の親近感と現実性を持ち、数へきれない価値を付加するであろう。その意味と価値が多くの人たちに認識され、欠かせないコミュニケーションの手段として認められた。従って、教育モデルについての研究、特に、教育モデルに内在する教育規律の立ち入った研究は、中国語が外国語教育の領域において解決すべき学術上の急務のテーマである。

海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルの研究は、従来のカリキュラム体系の理論と実践、言語知識と応用の間のつながりが切れている現状にメスを入れることである。“実践性を強調する”中国語教学原則の特色は、長期の実践を基に新たな教育モデルを探究し、外国語としての中国語教育活動に対する理論と応用の促進に寄与することにある。一つの特色ある立場から、中国語教材の編集に理論的基礎を提供し、言語習得理論を豊かにし、自然状態の下に外国語学習過程における母語の負の転移の影響を取り除く上で、理論と実践経験の両面から貢献することにある。

なお、母語と学習言語との関係に関わっては、次のよ

* 三重大学国際交流センター客員教授

** 天津師範大学国際教育交流学院院長・教授

*** 天津師範大学国際教育交流学院副院長・講師

**** 天津師範大学国際教育交流学院・講師

うに捉え用いることにする。既に獲得している言語の規則を学習している他の言語に適用すること、これを「転移」と呼称する。「転移」により学習言語の理解がしやすくなることを「正の転移」といい、「積極的転移」と呼ぶ。反対に「転移」により学習言語の理解が妨げられたり、あるいは間違っ理解したり使用してしまうことを「負の転移」と呼ぶことにする。「負の転移」のことを「干渉」と言うこともある。

二 海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルの言語能力要素についての教育構想

外国語教育に関して、数多くの成功している教育流派が挙げられる。例えば、「直接法」、「構造法」、「機能法」、「機能構造法」等々である。各流派は、一定の歴史段階と言語環境の下で、外国語教育に対して欠かせない重要な役割を果たしてきた。言語学習の手段と方法が歴史的制約を乗り越えた現在、新しい言語学習条件の下にある言語学習者が伝統的な外国語教育と学習方法に沿って学ぶとすれば、現実条件下の優位性を見失ってしまい目的を達成できないことになるに違いない。現代技術条件の保障の下で、人びとは、長い間、待ち望んでいた真実の学習環境で外国語を学ぶことが、一定の教育モデルを通して実現できるようになった。

1. 外国語聴解訓練

伝統的な従来の聴解練習は、テープレコーダーで会話教材を放送することによって行われる。しかし、現代の技術条件下で、新たな手段で訓練を展開することが可能となった。すなわち、(1) インターネットを通じた一対一の生聴解訓練、(2) インターネットで提供されている外国語ラジオ放送、TV 番組の音声材料、(3) インターネット電話 (sky life) を使ったの言語の実践練習、(4) 実際の文化的背景をもちこんだ外国語 TV ドラマ、映画、インタビューなどを記録した DVD、(5) 常に携帯して利用のできる便利な MP3、MP4 を活用した電子視聴教材、である。

2. 外国語会話訓練

従来の伝統的な会話訓練は、実際の会話環境を模倣し編集した教材を使用して、学習者に練習させることである。だが、ほんとうに自然な会話環境での訓練形式は、海外では様々な制約がある。現在、このような制約は、国際企業でのインターンシップや海外留学生との交流、また、現代技術を利用して開発された学習機器、実践性をもつカリキュラム体系の編成などにより改善しつつある。

3. 外国語読解訓練

従来の読解訓練の材料は、教科書や補助読み物、新聞、書籍などで構成される。しかし、教科書の真実性の乏しさ、又、海外での読解材料収集の難しさといった問題を抱えている。現在の技術条件下で、読解資料の取得源は、大幅に拡大した。すなわち、(1) インターネットにより、各種原版の読み物を手に入れることが容易になった。ただし、重視されなかったり十分に採り入れられていない。学習者の目的によって、インターネットで検索しダウンロードした材料は、基本的に学習者の読解と分析を満足させ、外国語読解の範囲を幅広く拡張することになるだろう。読解資源の十分な利用は、教育体系設計において鍵となる問題と思われる。教師の読解指導、授業中の教育的配慮、教育思想の認識などは、学生が読解資源を十分に利用できるかどうかの決定的な重要要素である。(2) 学生にとって原版の読解は、言語に内在的な構造、言葉のスタイル、素材の豊かさなどを味わえる有効な学習である。しかし、外国語学習者にとっては、限られた語彙数に妨げられて、大量の時間が単語の意味探しに費やされてしまう。この問題による読解数の量的減少、学生の読解に対する興味の喪失など、外国語の総合能力の向上にマイナス影響が出てきている。現代の技術条件に支えられて、外国語としての中国語読解方式には、いろんな選択肢がある。学生が中国中央 TV 局 (CCTV.COM)、中央人民ラジオ放送局 (CNR.CN) のホームページに登録すれば、新聞や番組の材料を読みながら読解文字と対応する音声も聞くことができる。同時に、ネット上の文字を読解し翻訳ソフトを使用して、語彙の意味理解を可能にする。このようにして、学生は、読解効率を高め、読解の魅力を増長させることになるだろう。

4. 外国語作文訓練

伝統的な作文訓練は、教師が指定した範囲に作文条件を決め、説明された文体の仕組みと作文技術に沿って、作文を完成する実践過程である。このような練習は、日常の実際の作文、特に職場に求められる作文能力とあわない点も存在している。作文要領、能力、言葉使い、構成の仕組み、又、作文スタイルなどの訓練を強化し、実際の必要に応える能力を向上させることがポイントとなるだろう。この問題の解決は、理論指導により効き目を現わす方法ではなく、はっきりした目標の上に実際の任務を与えて、学生に練習させることに価値をおく実践性を強調する作文訓練である。このような作文練習は、学生の成功意識を高め、学習の熱意を強め、無意味な模倣を避けることになる。

一方それ以外にも、インターネットのサポートを通して (YAHOO.COM, SINA.COM 等)、文章を翻訳する技術もえられる。この条件では、外国語で文章を作文

する過程での根本的な問題を解決できない。しかし、言語能力が不足している段階で、単語と言葉の数量を増やす一つの手段として、時間を節約し効率を高める道となると考えられる。

三 海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルのシステム設計

海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルは、現代の技術条件を利用して、“実践しながら学習する”環境を創り、教師の指導、カリキュラム体系の編成、学生の実践の強調、評価と実践のつながりなどを含めた総合的なモデルである。このモデルの枠内で、教師の教授段取りは、外国語学習の内在的な習得規律の下に、又、中国語学習を実践の一環に向け押し進める前提となる教育理論の下に、カリキュラムの編成、教育内容の構成、実践環境の設定、実践成果の評価と単位の認定、現代技術の利用など、体系的で一環させて行うことにより実現できることとなる。

1. 海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルは、内在的な習得規律の把握を重視する

長い間、人びとは、外国語学習の早期習得を重視し、成人の習得過程を軽視してきた。児童の言語学習は習得を主とし、成人の学習は学習を主とすると考えられてきた。しかし、外国語の実践能力と目標レベルは、知識の学習だけに解消できないことである。成人は、日進月歩の新しい概念、新しい語彙、新しい言葉の特徴に直面して、外国語能力と母語能力で表現できるところとなり、主要には習得の過程で獲得するのである。実践的環境を踏まえた習得過程は、従来の単調な言語知識だけの学習環境に比べて、言語を身につける上で優位である。

児童であると成人であるにかかわらず、習得の過程は系統的である。誰でも一つの言語習得の過程における系統の隔たりを避けることはできない。すなわち、“聞く”から“話す”までの“聴解会話”系統と“読む”から“書く”までの“読解作文”系統である。“聴解会話”系統と“読解作文”系統のバランスは、言語レベル上のバランスである。個人によってこのバランスのとらえ方は一様ではない、ということを観察することができる。例えば、(1) 話し上手だが字を知らない人の場合。これは、「聞く」と話す」能力が高いのに対して、「読むと書く」能力が弱い現象であり、「聴解会話」系統と「読解作文」系統のバランスが崩れてる証明の一つである。(2) 話ができない外国語学習者の場合。「読むと書く」能力が優れているけれども、外国語を話せない、外国語ニュースを聞いても分からないという現象である。これも系統のバランスが崩れたケースである。以上の例に示したよ

うに、言語学習の過程においては、“聴解会話”系統と“読解作文”系統の間には独立性と不均衡性があるということである。

“聴解会話”系統内部には、研究の価値がある規律が存在する。児童の言葉能力は、沢山聞くことの基礎の上に形成されたものである。最初、話せる言葉の数が少ないけれども、意味の分かる言葉の数はすでに多い。これは、“聞く”が“話す”より先、又、“強い”ということの証拠ではないか。外国語学習者にとって、話せることは大体聞いたことであり、聞いたことがない言葉は表現できないのが一般的ではないだろうか。

“読解作文”系統内部にも類似の規律がある。書ける文は、読んだことがあるのが普通である。文章を読めない人は文章を書けないだろう。言語習得規律から見れば、“読む”は“書く”より先であり、強いのである。

“聴解会話”系統と“読解作文”系統間のバランス、又、その系統内部のバランスは、“実践性を強調する”中国語教育モデルにあって、又、成人の言語習得の潜在力を見いだす過程において、特別に重視するべき点である。この二つの系統のバランスと連係に配慮し、又、学生の要望と興味を考慮して、バランスと整合性をはからねばならないのである。

成人の潜在的な言語能力を最大限に開発するには、学習者の根本的な要求と学習の特徴を重視しなければならない。成人の外国語学習の動機は、職場で運用できる一つのツールを身につけることにあると観察される。したがって、実践内容がある習得過程は、学習者の根本的な要求を満たし、又、言語能力の向上開発への道である。

“実践性を強調する”中国語教育モデルは、システム上から、“聴解会話”系統と“読解作文”系統間のバランスと内部バランスを総合的に把握して、必要な実践環境を提供し、成人の外国語学習条件を改善し、より整った体系的な言語教授方式ではないかと考えられる。

2. 海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルのカリキュラムと教育内容の構成

カリキュラム編成と教育内容の構成は、内在する習得規律把握の基礎の上に、組み立てられる計画である。カリキュラム編成では、“実践”の位置を特別に強調し、現代技術手段を利用して、学生の「聞く、話す、読む、書く」の総合的实际能力を養成する。実践を含むカリキュラムの比率は70%以上と設定する。教育内容は、実際的な視聴教材、実際的な会話訓練、刊行物などを主要な教材内容として、学生指導の過程で実践しながら学ばせ、実践中に問題を発見し、学んだ知識を運用して問題を解決する。又、足りない部分を認識し学んだ知識を検証する過程でもある。学生の勉学意識を励まし、間違いを恐れることなく引き続き挑戦する勇気を持って、言語運用

能力の経験を積み重ね実践能力を鍛錬する。教育内容の構成では、演習実践は10%前後の単位とし、学生の学業完成の必須条件として実践段階を促進し、実践の効果を評価する。例えば、指定したウェブサイトでの聴解練習、指定したウェブサイトでの読解練習、指定時間に目的語国の留学生との会話練習、規定された文体と文字数での作文完成等々である。又、カリキュラム体系の中に、実践科目に合致した弁論大会や聴解、会話、読解、作文、文字入力、職場中国語コンテストなどの競争活動も設けて、優勝した者には相応の単位を与える。このように実践を奨励し実践環境を創りだしながら、学生の実際の言語能力を向上させる道を開いていくことである。

3. 海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルの実践活動の準備と実践成果の評価

海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルは、実践活動とその成果に対する評価がとても大事なポイントである。カリキュラム体系の中に、実践の理念を実現するためには実践活動のサポートが必須条件となる。パソコンやインターネットの他に、会話内容を記録し、繰り返し練習できる専用語学学習機器（天津師範大学国際教育交流学院は、“実践性を強調する”中国語教育モデルに対応した学生用学習機器をすでに開発した。）、学生実習の受け皿、指定するウェブサイトの整理、海外中国人留学生団体との連携、教師のインターネット上の言語資料に対する研究と指導、70%以上の実践教育内容の設定、競争意識を高める言語技能コンテスト、10%の実習単位などの内容を、実施することが必要である。実践カリキュラムの開設のために、発音、文法に関する授業は、講義、誤りの訂正、知識構造の組み立てなどを重点として力を入れ、理論から理論に至る伝統的なモデルと区別する。特に文化的背景を含む授業教材は、学生を喜ばせる時代感があり、言語習得の正の転移規律に上手く利用できる。例えば、日本人学生に対して、学生が好む日本のアニメ作品を選んで、字幕と中国語会話の中国語版を見せ特定の画面と背景の下に、従来している日本語の会話内容と文化が自然に中国語へ転移し、中国語の表現方式を積極的に受け入れ学びとることができる。このような正の転移（積極的転移と呼ぶ）を十分に利用して、外国語学習の効率を高め、実践的に言語能力の向上がはかられることになるであろう。

実践成果の評価には、実践科目の単位と実習単位を含めている。学生が実践を通して獲得した実際的な言語能力と言語応用レベルが、評価の重点である。特に、言語表現に関する各種コンテストは、学生の学習にプレッシャーを与えると同時に動力ともなる。試験の代わりにみんなの前に公開するとあって、学生と教師間の対立（試験のため）を避けうる積極的な評価方式である。評価の旨は、

学生が実践に参加する度合い（多いか少ないか）、学生が実際的な能力を高めているか否か、教育効率が向上しているかどうか、などに重点が置かれる。

四 海外における“実践性を強調する”中国語教育モデルに関する認識

外国語としての中国語教育の中心は、中国語の応用能力を育成することである。実際的な中国語学習環境を創り、中国語学習と中国語使用の雰囲気を作り出すことによって、学生に実践の中で生きた生の言葉を学ばせ、言葉に対する感覚を育てる。これは母語による負の転移を取り除き、成人が言語習得する際の潜在能力を見いだすもっとも有効な道である。例えば、英語を母語とする場合。「私は、教室で中国語を学ぶ。」は、我在教室学習漢語。であるが、我学習漢語在教室。となり、「教室で」という場所を表す表現をどこに置くか母語 I study Chinese in the classroom. に引きつられ目的語の後に置く誤りである。日本語の場合。「私は、パンを一つ食べる。」は、我吃一个面包。であるが、我吃面包一个。となり、数量詞が名詞の前に来るという位置が間違っている。これが「負の転移」である。自然な環境の中で中国語を学ぶことによって、留学生の中間言語の生成を最大限に防ぐことができ、母語と外国語との自然な転換（積極的転移）の実現率を高めることができる。中国語学習の過程にある“インプット”と“アウトプット”の二つのルートを結びつけ、「インプット」と「アウトプット」の相互の転換を中国語の学習過程に用いることは、中国語水準を高め、応用能力を向上させる重要な手段である。学生の「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能の総合的な運用能力と均衡のとれた発展を育成することは、外国語としての中国語教育の基本的任務である。

私たちの研究目標は、海外における中国語教育の有効な道を明らかにすることである。中国語教育は他の外国語教育と同じような問題に直面している。私たちの主張は、実践を通じて、歴史的に構成された社会的共有としての記号体系である言語 (langue) から、実践的な言語表現行為である言 (parole) に移り、さらに言語に戻って言語能力を上昇させる、すなわち、“言 (parole) → 言語 (langue) → 言 (parole)” という成人の言語習得モデルを実現することである。海外の外国語教育専門家の意見を得ながら、海外における外国語教育の教育効率を向上させるために、運用可能で有効なモデルを探求したいと考えている。

[参考文献]

1. 「21世紀に向けた中高級中国語研究生を育てる目標とスタンダードの教育アプローチ」『言語文字応用』1998年3月所収。
2. 『海外における中国語教育比較研究』教育科学出版社、1998年7月。
3. 『教学方式と教学方法の改革－研究生学習の視角から』北京理工大学出版社、2004年6月。
4. 「言から言語まで」『世界漢語教学』1987年4月所収。
5. 『中国語実況聴解』語文出版社、1993年5月。
6. 『高級中国語聴解テキスト－生録音実況』語文出版社、1995年5月。
7. 『実況中国語聴解初級』北京言語大学出版社、1997年12月。
8. 『中国語試験対応要旨』聴解、総合、閲読、文法シリーズ、韓国松山出版社、1999年。
9. 「中国語語彙に関する層面要素分析」『韓国中国語論訳从刊』2000年6月所収。
10. 「中国語上声の調型曖昧の傾向と教学特徴」『韓国中国語論訳从刊』1999年6月所収。
11. 『中国語会話291句』韓国松山出版社、2001年5月。
12. 『新聞を読んで学ぶ中国語』三聯出版社、2003年第一版。
13. 『テレビで学ぶ中国語』三聯出版社、2003年第一版。
14. 馬箭飛「中国語教育のモデル化研究初論」『言語教学と研究』2004年1月所収。
15. 陸儉明「漢語言文字応用の多面的観察」『言語文字応用』2000年2月所収。
16. 李曉琪「語彙成立に関して－文法教学モデルの思考」『言語教学と研究』2004年1月所収。
17. 劉 洵『対外中国語教育学引論』北京言語文化大学出版社、2000年。
18. 白樂桑『説字解詞』北京大学出版社、2002年。
(中国語原文からの日本語訳は、楊薇と伊藤が担当した)